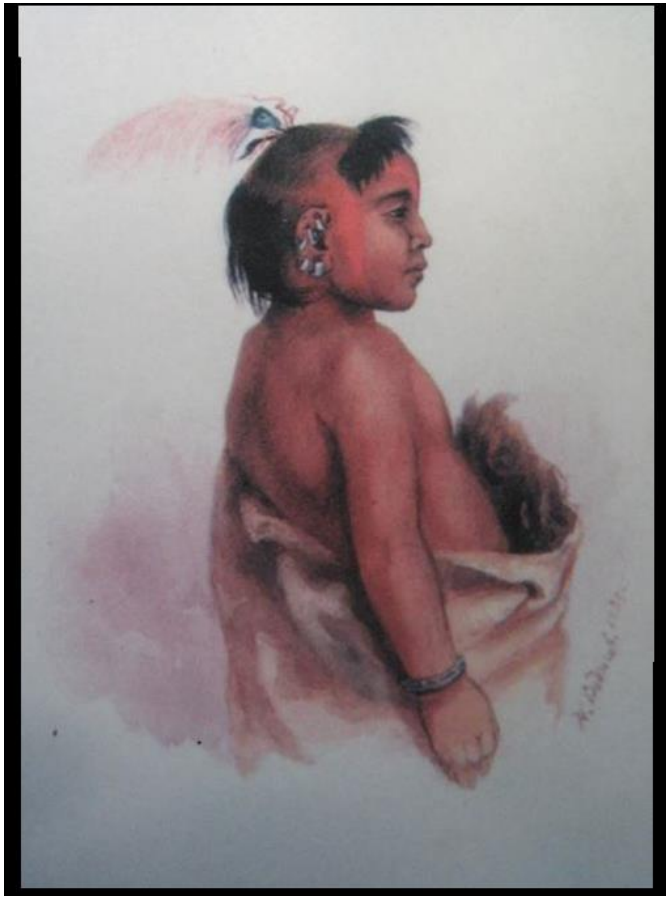
The Omaha Tribe

By Alice C. Fletcher & Francis La Flesche

このThe Omaha Tribe Volume I、IIと言う本は、人類学者のAlice C. Fletcherと、インディアンの酋長でもあるFrancis La Flesche により纏められた、アメリカインディアンの文明化政策を最も早く、そして、上手に取り入れたオマハ族について記述されたものです。その彼らの歴史と価値観を覗いてみることは、アメリカという国の歴史を語る上では、とても重要なことと考えています。これを出来るだけ沢山の人に紹介して、アメリカの歴史の裏に隠されている白人たちの価値観を、インディアンの側から理解してもらおうと簡単に整理してみました。

Seiji Suzuki



尚、写真については、原本、wikipedia, internetなどから引用したものを含んでいます。

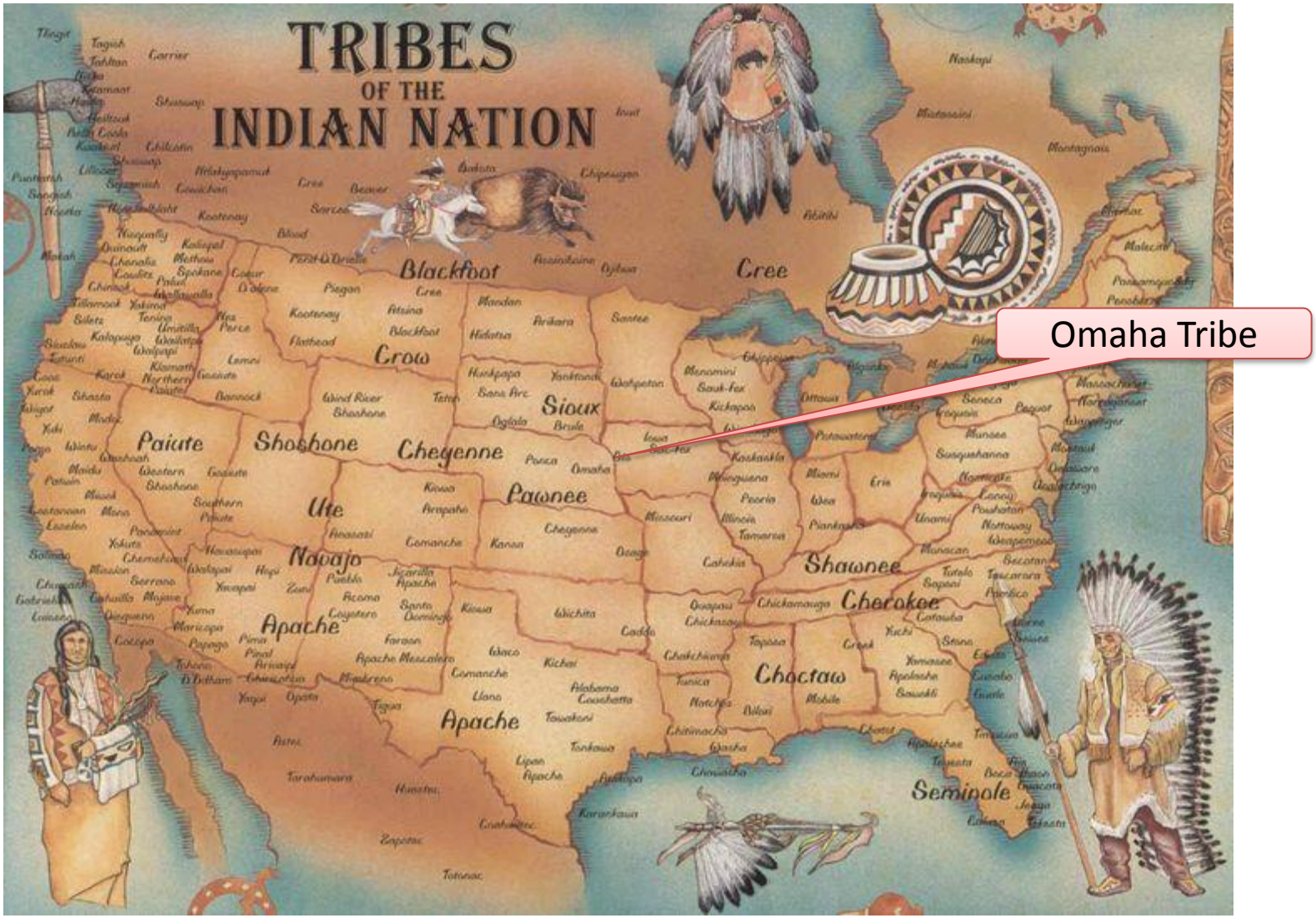
Alice C. Fletcher の 「はじめに」 より

オマハ族に関する記述は、その部族の人達と一緒に生活し、そして、これまでの29年間の間に、多かれ少なかれ、お互いに意思疎通をはかるなかで、私が知りえた情報をもとに整理してきた個人的な研究の結果をまとめたものです。

（中略）

次に掲げたような、オマハ族の慣習、宗教的な儀式、そして、信仰に関する記述は、共同作業によるものである。25年以上もの間、著者は、その部族の主要な酋長の1人Joseph La Flescheの息子でもある、Mr. Francis La Flesche (pl. 1) を共同研究者として持つことに恵まれた。Mr. La Flescheは、少年時代には、ここで記述されているような宗教的な儀式の沢山の知識を得る機会に恵まれた。後に、彼は、彼の父や、こうした伝統的な典礼や宗教的な儀式を守っている老人達から、それらの意味の説明を受けた。こうした素晴らしい記録を持ち、そして、自分の気持ちのなかに、彼等の唄、宗教的で述べられる話、そして、彼らの社会での宗教的な儀式の意味など、彼の部族の人達の歴史について、それらが彼等の間で知られているありのままの姿で、なにか形として記述されたものにして残したいという思いが起こり、Mr. La Flescheは、彼の素晴らしい計画を実行するために、かなり若いころから英語を完璧に習得し、そして、部族の間で急速に消えつつある伝説を集める決心をしていた。

（後略）


TRIBES
OF THE
INDIAN NATION
Blackfoot
Cree
Crow
Sioux
Paiute
Shoshone
Cheyenne
Pawnee
Ute
Navajo
Apache
Shawnee
Cherokee
Choctaw
Seminole
Omaha Tribe

Western Movement
Arikara
Iowa
Big Souix
Ponca
Omaha
Cheyenne
Pawhee
Oto
Kansa
Osage
Quapaw
N.D.
S.D.
NEB.
IOWA
WIS.
IND.
OHIO
PENN.
N.Y.
MD
W.VA.
VA.
N.C.
S.C.
KY.
TENN.
ARK.
MO.
ILL.
KANS.
N.M.
Fargo
Minneapolis
Sioux Falls
Rapid City
Milwaukee
Detroit
Chicago
Cleveland
Toronto
Ottawa
Pittsburgh
Columbus
Indianapolis
Cincinnati
Louisville
Nashville
Memphis
Little Rock
St Louis
Kansas City
Des Moines
Davenport
Wichita
Oklahoma City
Denver
Pueblo
Washington
Richmond
Charlotte
Missouri
Mississippi
Ohio
Illinois
Wisconsin
Iowa
Des Moines
James
Little Missouri
Cheyenne
Niobrara
Platte
Republican
Smoky Hill
Arkansas
Cimarron
Canadian
Neosho
Verdigris
Kaskaskia
Wabash
Green
Cumberland
Tennessee
White
Scioto
Kanawha
Allegheny
Rock
St. Croix
Chippewa

Omaha Tribe とPonca, Osage族の村の組織との類似性
・・・・> 彼らは元は1つの部族だった。

PONCA TRIBE

七つの男の血縁集団

- WACA'BE GENS
- THI'XIDA GENS
- NI'KAPASHNA GENS
- PO^{N}'CAXTI GENS
- WASHA'BE GENS
- WAZHA'ZHE GENS
- NU'XE GENS

OSAGE TRIBE

五つの男の集団

- HO'^{N}GA UTANIATSI GROUP
- WAZHA'ZHE GROUP — 7つの準集団
- HO'^{N}GA GROUP — 7つの準集団
- TSI'ZHU GROUP — 7つの準集団
- NI'KA WAKO^{N}DA GROUP — 3つの準集団

組織の中で、独特の機能をもつ集団があった。

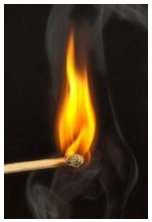
戦争用の武器を作る

道を整備する

OMAHA WESTERN MOVEMENT

石を削る → 鏃を作る → ナイフができた → 矢の強度UP

穴の開いた楡の木 → 擦ったら火がでた



鹿の肩の骨 → 刀が出来た

粘土の山 → 容器を作った → 焼いたら水がもれない、硬い入れ物

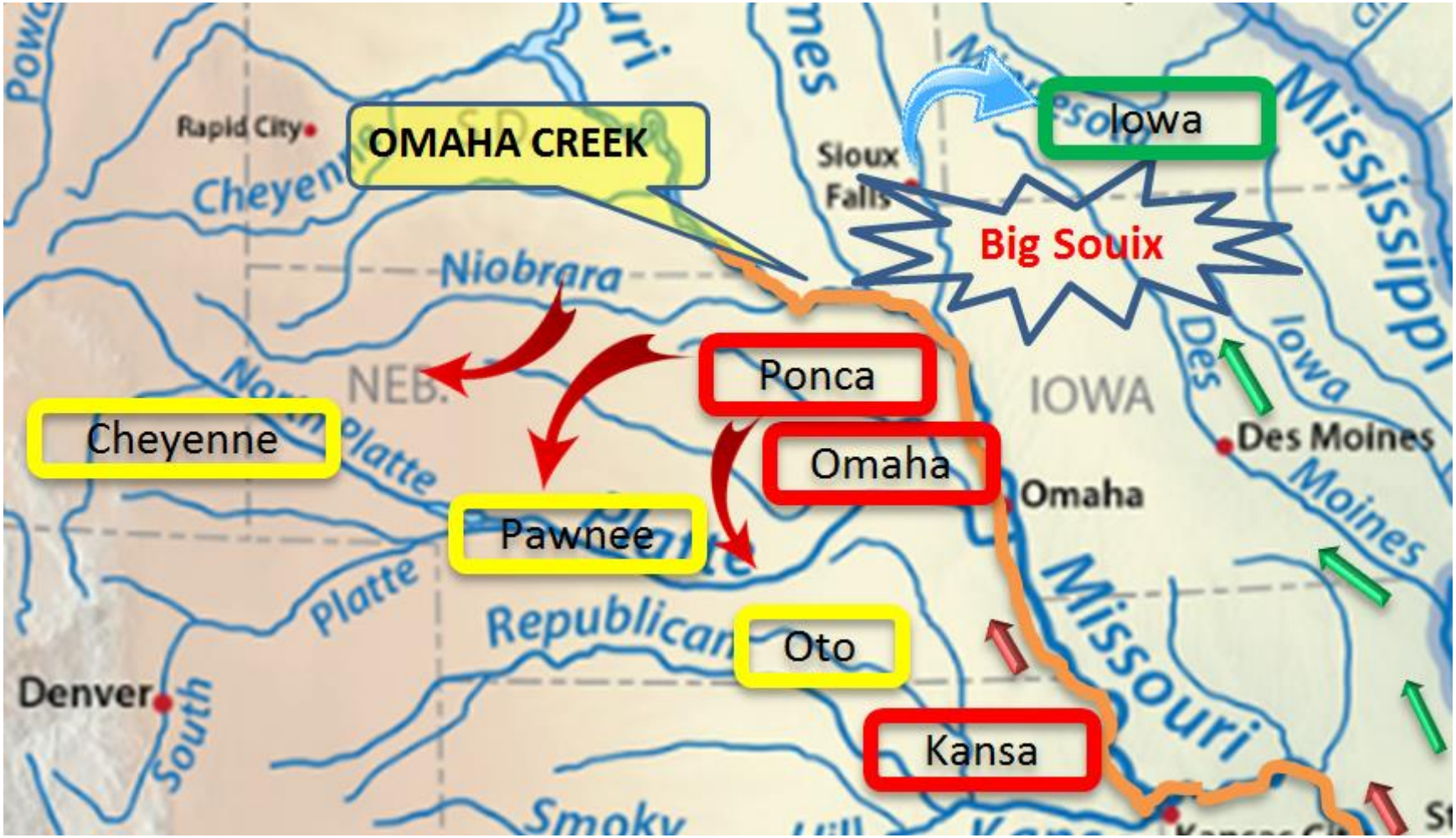
草 → ナイフで毛皮の残りの肉を削り落とした → 布ができた

石 → 斧ができた

草で家の覆い → 木の皮で代用

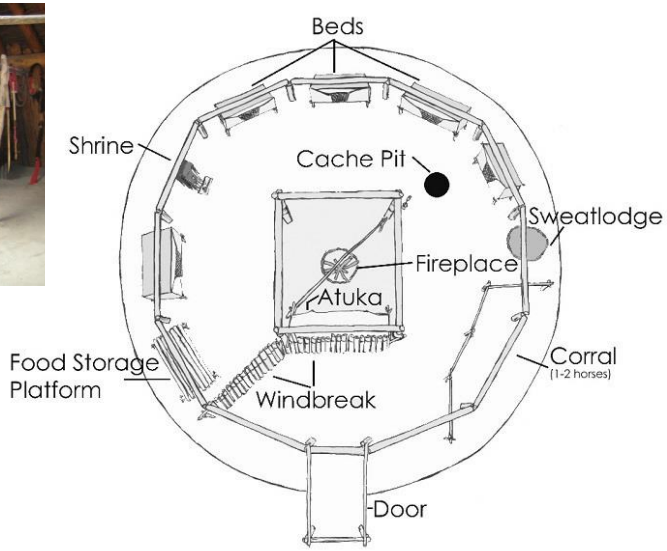
トウモロコシとの出会い

犬との出会い



Ponka 族は、どうせ死ぬならと、敵対する部族に立ち向かっていった。

Earth lodge

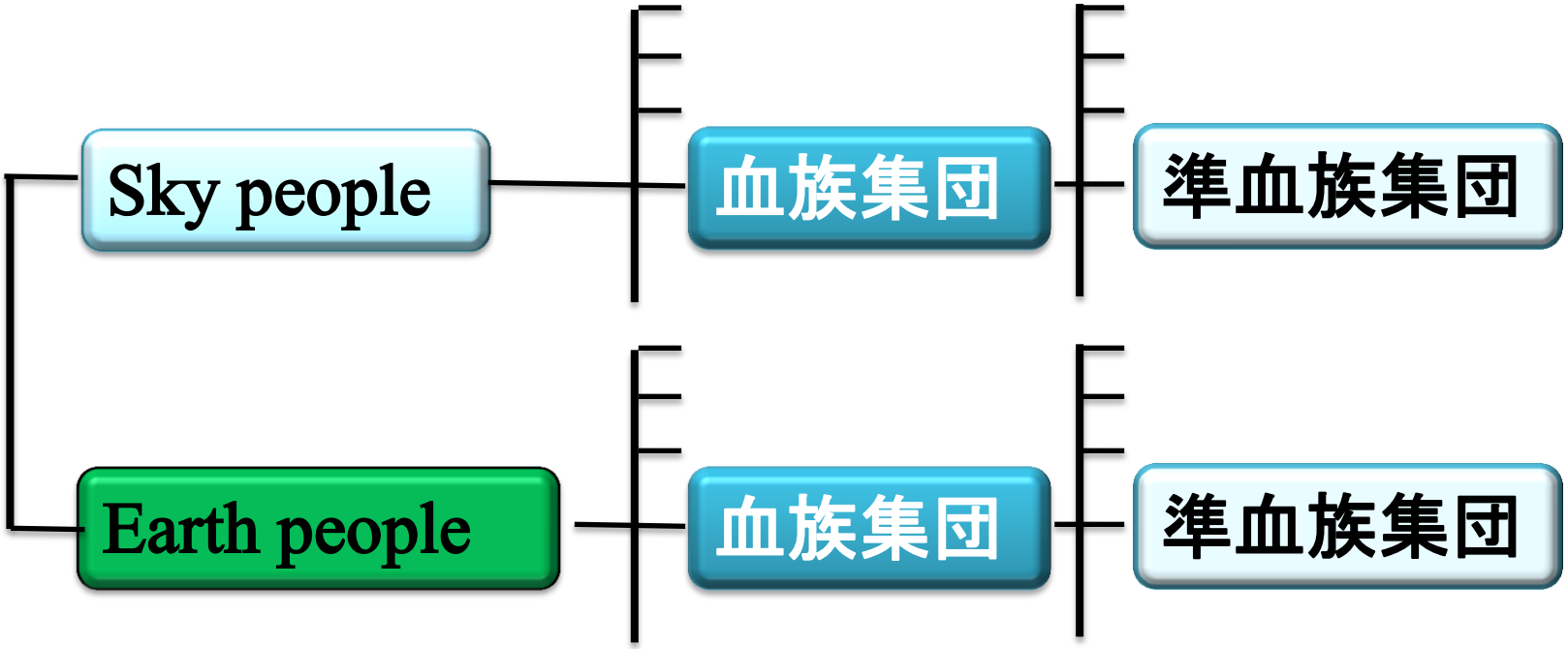

Beds
Shrine
Cache Pit
Sweatlodge
Fireplace
Atuka
Food Storage
Platform
Windbreak
Corral
(1-2 horses)
Door

Organization of tribes

血族集団　＝"村"

部族外結婚を人為的に進めていた。

お互いに結婚を禁じられている村があった。



それぞれの血族集団には独自の役割があった。

Earth people

日常の生活にかかわる出来事の面倒を見る　役割を担っている血族集団

Hon’gashenu

村の南側の地域に住居を構えて生活をしていた血族集団

食料の確保に関連した仕事
穀物、バッファロー狩

四つの血族は 、統治に関する権威、平和を維持する権威を持っていた。

- **We’zhi^{n}shte**
  戦闘のテントの管理
  バッファロー狩の斥候
- **I^{n}ke’çabe**
  - Ninin’bato^{n} — 神聖なる杖を管理
  - Wathi’gizhe
- **Ho^{n}’ga**
  - Waxthe’xe — 神聖なる杖を管理
  - Washabeto^{n} — White Bafallow Hideを管理
- **Tha’tada**
  - Waçabe itazhi — 黒い熊の儀式
  - Wazhi^{n}ga itazhi — 鳥の害を守る
  - Ke’in — 雨から守り、嵐を追いやる
  - Te’pa itazi — パイプの運び役
- **Ko^{n}’çe**
  カンザス州は彼らにちなんで付けられた名前

Sky people

生活の中での精神的な出来事、呪術、宗教にかかわる儀式などでの役割

Inshta'çunda

村の中では、南側に配置されていた。

生命にかかわる宗教の力の表現に関連した儀式

- **Mon'thinkagaxe**
  岩と石と、そして、灰色の狼に関係していた。
- **Teçin'de**
  バッファローの尻尾
  タブーは動物の退治に触れること
- **Tapa'**
  星と夜空に関係
  タブーは、炭と緑青に触れること
- **Ingehe'xhide**
  タブーは動物の退治に触れること
- **Inshta'çunda**
  天界の力を象徴
  稲妻にちなんだ血族

INDIAN VILLAGE OF POMEIOOC (no. 34A, cf. pls. 81, 134)

村のイメージ

夫々の小屋に各血族が住んでいた。
血族は父親の血筋でつながっていた。
Omaha族の小屋は、アースロッジで出来ていた。テピーの住居は、狩に出かけたときの移動用住居

小屋の入り口は、東側を向いていた。また、村の入り口も美化し側に向いていた。

"統治機関"

Nikagahi xude

その構成員には制限はなかった。
Nikagahi sha’beの承認次第、
志願する人の記録と贈り物が評価された

欠員が出来たときだけ

Wathi^{n}’ethe;

sha’be になろうとする人は、部族の繁栄に関係するような、行動とか、贈呈品を必要とした。贈呈品は、**Seven Chiefs** に贈られた。

Nikagahi sha’be

七人の構成員は、Nikagahi sha’be　の地位にあったもの。このほか、神聖なるパイプの保管者など、五人が参加していた。
最も権威のある2人の、Nikagahi u’zhu　が仕切っていた。

The Council of Seven chiefs

部族の中の平和、地位を維持する。
同盟を確立し、毎年恒例のバッファロー狩りの時期を決定する。
指導者として行動をとる男の指名
　　他の部族との友好的な関係を確立する

"犯罪と罰則"

駆け落ち、姦淫

夫や彼の親戚の者が処罰を執行

Wathihi の違反行為

意図的に殺人をした場合
村の外で生活

通常４年間 → 追放の処罰

部族が狩をしている時に、獲物を驚かして、
逃がしてしまったなど、狩の好機を逃した → 鞭打ち刑

自分のためだけの狩をした

Wazhiagthe

部族の中の平和を乱した → 動物たちとの親しい関係を絶たれる

"食料の探求"

食料、衣料の材料として、トウモロコシが生活の中心だった。
バッファローが出てきて、生活の中心が狩に移った。

トウモロコシの儀式

狩猟

狩猟のやり方

バッファロー
エルク
＞
群れをなす

鹿、アンテロープ、熊
単独行動

Eshno^{n} mo^{n}thi^{n}
一人で歩いていく。
一家族が単独行動

Abae
男が、単独、あるいは、2，3人で、家族を残して行く

Uzho^{n}
男達が小さな集団で行く

Shko^{n}'the
男達が集団で行く

殺す時のルール

Tathie'une
肉を切る人間

肉を切りとる部位、順序、切り取り方、分配

バッファローは全ての部位の物が利用されていた。

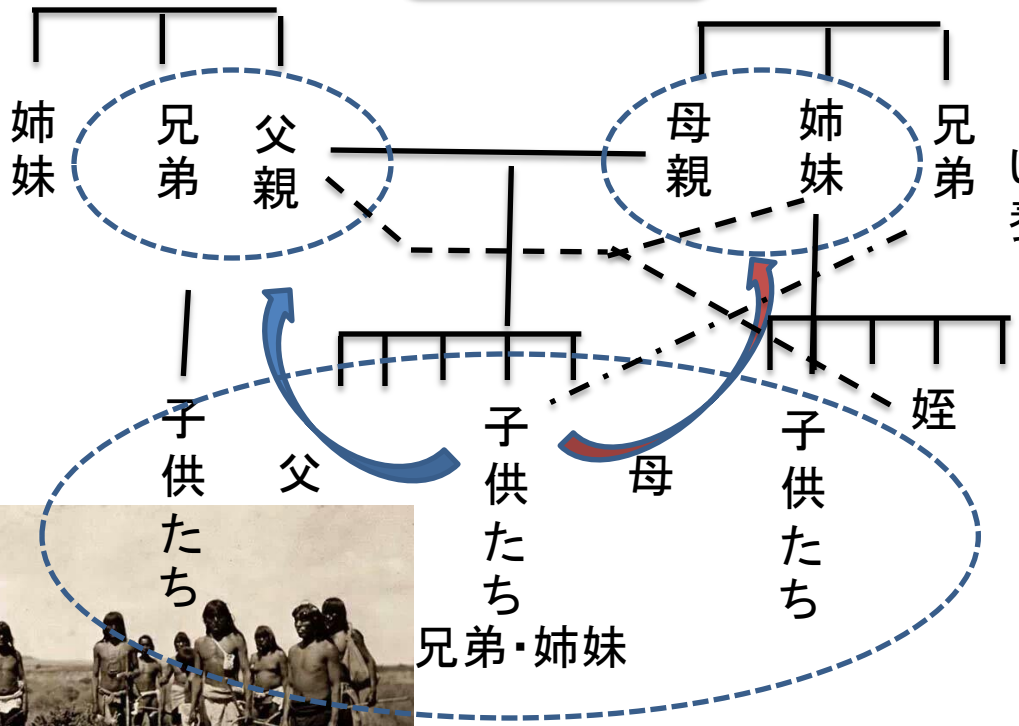
"社会生活"

血縁関係用語

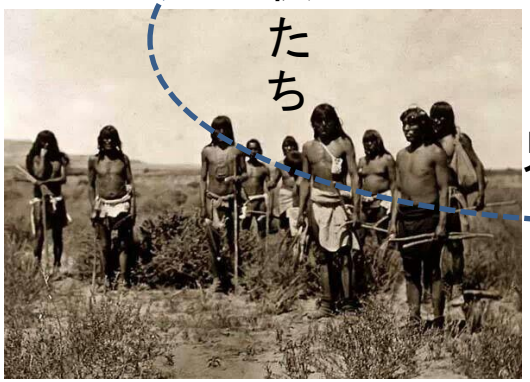
親が亡くなっても、よそ者の手に陥らないようにするため
家族の絆を壊すものではない
死者に対する敬意

血族集団

同じ血族集団の中では結婚できない
母方の血の系統に近いものであって
はならない
　村の中での部外結婚の原則



いざと言うときには
養父となる



呼び名で区別する

個人の名前では
呼ばない

呼び名で区別する
2人の間柄を表す言葉

子供の躾け

- 赤ちゃん言葉は無い
- 個人の名前では呼ばない
- 大人の会話に口を挟まない
- 鞭打ちなどしない
- 目上の人への尊敬

- 敬語の使い方を習得
- 子供の喧嘩はない
- 親への反抗はない

家長、客人と囲炉裏の間を歩かない

Turning the Childの儀式

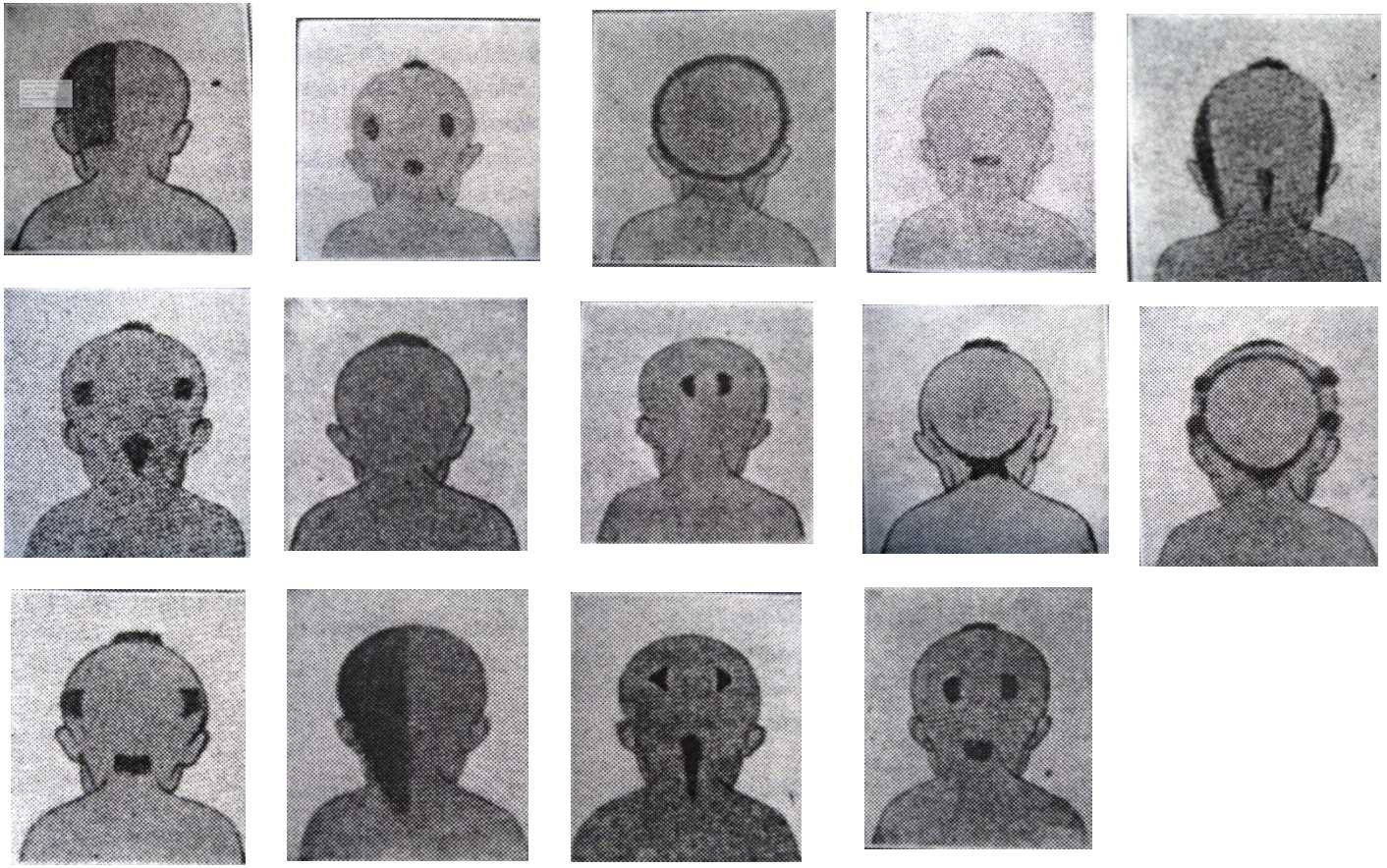
歩けるようになると → 髪の毛の房を切り落とす

命を雷神に捧げる
戦士として部族を守る使命

Nikie の習慣

夫々の準血族が別の形の髪型をしていた。
どこの血族の者かがすぐに分かる。

子供たちの髪型
血族ごとに子供の髪型が決まっていた。



"ローブ" もしくは "WAIN"

個人としての重要性

(a) "偉大な水"の近くに居た時
"わが身を覆うという望み"から生まれた。

(b) 超自然に対する象徴的な依存性を示す
全ての生命は1つのもの、人の物理的存在は、生命の別の形のものであり、この見えない生命は、物理的な死というものでは破壊されない。
より強化された精神を持ちたいならず、外観上のある形を通さなければ生らない。　生きている動物に見せかける。

(c) 個人的な目標の成就の宣言として
戦闘での栄誉の評価　　独特の装飾
個人の手柄を表明する。

社会的な重要性

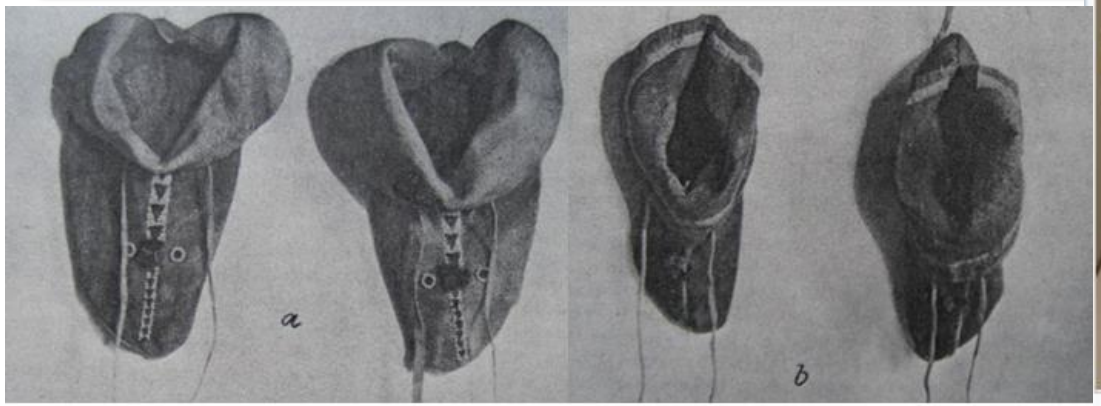
血族関係集団を作ること

ローブを使った独特の言い回しがあった。

- 着方
- 動かし方
- 使い方
- 恥じらいの表現
- 歩き方で感情を表現
- 動作の目的を表現　　バッファローの狩に行くぞ
- 老人らしくを表現
- 恋人を待っている表現
- 部族の仲間に自分の考えを印象付ける表現
- ためらいを表現

モカシン

　同族部族の間では、モカシンは集団の中での義務を強要し、かつ、意味合いが社会的である儀式の中での重要な役割を持っていた。
　モカシンは、各々の部族が独特な切り取り、飾りを付けていた。・・・>履いているものを見れば、どこの部族のものかを見分けることが出来た。



男性用のモカシン　(a)　と　女性用のモカシン　(b)

1900年頃にワイオミングのショショーニ族インディアンが作った、ビーズ飾りのモカシン

"娯楽"

狩に出かける真似事	狩人と子馬
Uhe'bashonshoⁿ	“くねり路”
Wahi' gaçnugithe	“骨すべり”
Wa'baha	“猫ゆりかご”
Zhⁱⁿga utⁱⁿ	“小鳥撃ち”
Tabe gaçi	“ボール遊び”
Pa 'çinzhahe	“輪投げ”

その他、男達には“しごきのゲーム”、ギャンブルなどもあった。

"WAWA^{N} の儀式"

“誰かのために歌う”

平和を確実にするため。
部族間の平和に対する責任（ポンカ族、シャイアン族、アリカラ族から、オマハ族に対して意思を表示する。）

二本パイプが主役

“誰かのために歌う”
一本は、女性の要求を表す
一本は、男性の象徴
} 色が塗られていた

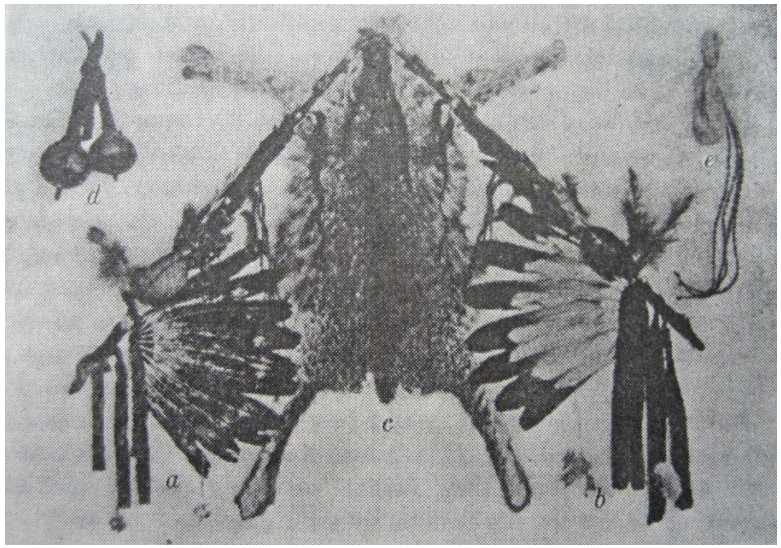
パイプそのものがリズミカルな音色
パイプを振り波のように動かす。

式の中では、Hu^{n}gaと言う特別な名前が使われていた。
　リーダーを指す言葉だが、平和の使者・子供という意味で使われた。

子供は、次世代の主役である。
子供は、汚れのない特性
子供は、戦闘的な精神がない

パイプを他の部族のところに贈呈する使者

これが、Hu^{n}ga



(a) 空色のパイプ
　　イヌワシの羽根がついている。
(b) 緑色のパイプ
　　女性の象徴である地球を表している。
　　イヌワシの羽根は、先端が黒いもの
　　・・男性を象徴
　　それぞれのパイプには、馬の鬣を使った簸れ、
　　フクロウの羽根のひだえり、アヒルの
　　首からとった
　　赤い帯、などがついていた。
(c) 山猫の皮　　先端には頭がついている。
(d) ガラガラ　　瓢箪
　　卵と生きているものの再生を表す
(e) 膀胱で出来たボーチ　　食べ物と衣服を象徴
　　パイプはトリネコの木でできており，
　　これにアヒルの首、キツツキの頭などの
　　装飾がついていた。

このパイプが平和のシンボル

お礼に子馬が用意され、贈呈には何日もかけて祝宴が開かれた。

"戦闘"

戦闘は部族の発展のために不可欠のものであったが、戦闘で手柄を立てることは、部族の中での地位が上がった

戦闘の形態

村の防御

女性と子供たちを守る戦い

自分を守る　　家族を守る　　集団を守る

防御されるべき組の中における永続性に対する必要性

信仰の表現、　　儀式につながっていく。

攻撃的なもの

“野望を持った男達の喧嘩、たくらみ”

全てのオマハ族の男達は、子供の頃に戦闘の神としての雷に捧げられていた。

鳥　　嵐、ならびに、嵐の雲、雷の上にあり、戦闘の神の上にある。

鳥の飛翔は　　神に近いところを飛び、眼下の全てのことを眺めている。

"戦闘の栄誉と栄誉の飾り"

認証された栄誉

(1) 手もしくは弓で、傷ついていない敵を討つこと
(2) 傷ついた敵を討つ事
(3) 死んだ敵を討つ事
(4) 敵を殺した時
(5) 頭皮を確保した時
(6) 敵の体から頭を切断してくること

栄誉の飾り

(1) イヌワシの頭飾り、天頂に垂直に
(2) イヌワシの頭飾り　両方に水平に
(3) 鷲の羽根を頭の後ろに吊り下げる
(4) 矢を髪の毛の房に通す
セレモニーのダンスで弓を持つ
(5) （3）と同じだが、鷲の羽根を使う
(6) セレモニーのマスターになれる

クロウという特別の飾り

背中や腰の周りのベルトに巻きつけた飾り
　鷲の羽根、皮、頭、くちばし、尻尾などが
　付けられていた。
　二本の赤い矢
　尻には、右側に　狼の尻尾
　　左側に　カラスの皮

インディアンの武器

弓と矢

槍

盾と棍棒

弓：
　ヒッコリーの木
　トリネコ
　アカシア
弓の弦
　バッファロー、エルクの
背骨の付け根の腱

矢：
　トリネコ
　ハナミズキ
(1) mo^{n}
　火打ち石や石の鏃を使った矢
　大掛かりな狩猟、防御の戦いのとき
(2) Hede'gapai
　鉄の鏃のついてないもの
　小さな獲物、練習、賭けで使用していた。

"組織"

部族

公の組織

戦士たちだけの集団

- Hethu’shka　最も大きく、且つ又重要なもの
- Pu’othon　酋長だけの排他的なもの
- Ki’kunethe　部族の指導者たち
- T’ega’te
- Monwa’dathi と Tlka’lo　マンダン族のこと

秘密の組織

- Monchu Ithaethe　"熊が同情を示した人々"
- Te Ithaethe　"バッファローが同情を示した人々"
  傷を治す知識を授けられていた。
- Wno^{n}xe Itaehte　"亡霊が同情を示した人々"
  死を予言できる能力を持つ
- Ingthun Itaethe　"雷が同情を示した人々"　魔法の力
  将来の出来事を予言できる能力を持つ
- Hon’hewachi　"100以上のWathi^{n}etheを持った男達による組織"
  高い尊敬をされていた。

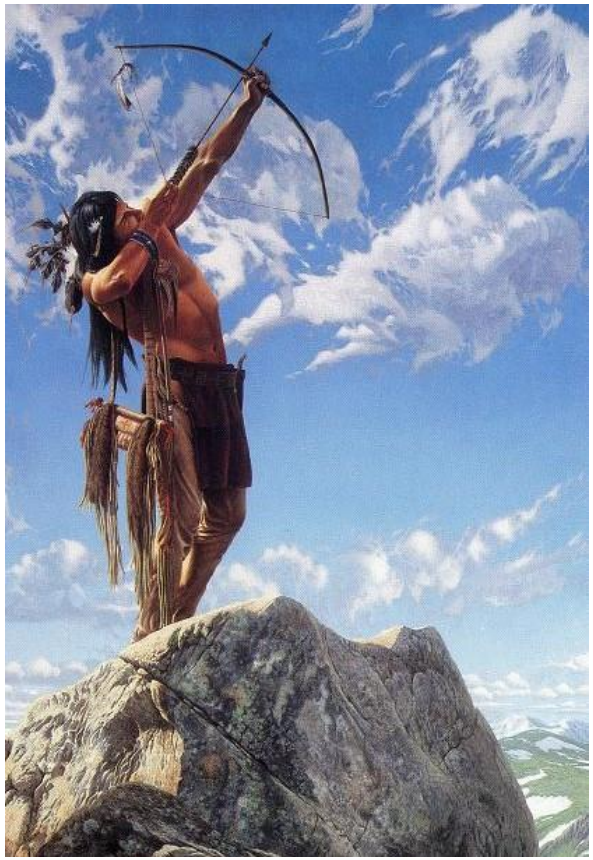
Hethu'shka と言う組織

Konçe　“風の人々”　2本のパイプの保管者

人々の間の英雄的な精神を鼓舞する。
歴史的、かつ、勇ましい行いの記録を残す
雷が守護神

オサゲ族、アイオア族、オトー族にもこの組織があり、古くは、スー族のなかにもあった。

会員の資格は、 戦士だけ
リーダー、伝令官がいた。



歌

歴史の記録を残すもの・・・・
男達我どのように組織に忠誠を刺激されたか
勇敢なる男としての考えに調和した行動をとったか

(1) 兄弟的な意識と忠誠心

(2) 部族を指している言葉、敵に対する挑戦　「さあ、来い。」

(3) 女と子供たちの保護

(4) 男の命は無常なもの

(5) 訓戒の歌

(6) 他の部族に対する用心の必要性

(7) 両親に対する忠誠

(8) Agahamo^{n}shi^{n} 戦士を褒め称える

Hon’hewachi

会員資格に適合すると　**Ni'kagahi wan “女の酋長”**
となる、未婚の少女にある種の入れ墨をする権利があった。

100のWathi^{n}ethe

Hon'hewachi に入るための条件

七人の酋長会で認めたもの
- 他の目的の貯めに使う贈り物は不可
- 部族に利益をもたらすもの
- 貧困な男とか女のためのもの
- 部族に平和をもたらすもの
- 戦いの中でわが身を危険に犯してまで同僚が捕虜になるのを防ぎ、命を救ったもの。

WATHAWA(祝宴)

Wathi^{n}etheののの内容を一本一本調べる儀式
馬、ローブ、弓と矢、矢筒、パイプ、貝の平盤など
パイプ（煙草）を吸う儀式
食事・・・トウモロコシで出来た粥

入れ墨

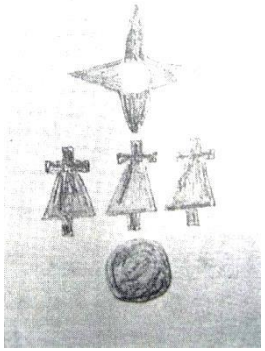
少女に入れ墨をする

100本のナイフと斧が用意された
戦闘の栄誉を授けられて男達が入れ墨をする

赤い斑点　　太陽

彼女が騒いだりするのは、彼女が不貞だった証拠とされた.

星　　夜　　偉大なる母の力の象徴
四方を指しているのは、
命を与えてくれる風
首の後ろ　　月
手の甲　　亀　　水や風に関連



手に付けられた入れ墨
昼と夜との合体により、人類が生まれ、維持されていることを示している
人類の永続性

この少女だけが、白いバッファローが殺されたときの、その皮を手に入れることができた。

WASHIS'KA

貝の組織

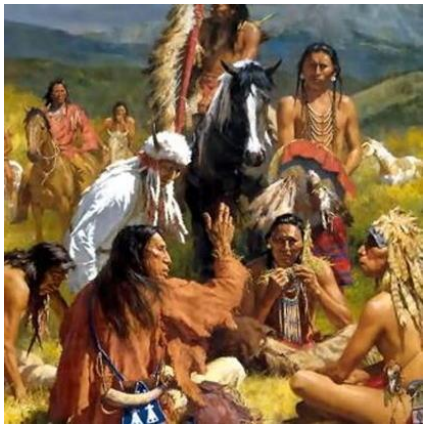
ウィネバゴ、オトー、チペア族などにも
同じような組織がある。

起源

よそ者と、四人の子供を持つ家族の物語り

夫を、強い男にし、周りから尊敬される男にしたいと願う妻
村にやってきたよそ者の接待を計画
四人の子供を可愛がるよそ者
部族が狩に出かけた後、旅に出た。
よそ者は、不思議な力を男に授けた
　　木の種類、特徴、薬効など
　　エルク、バッファロー、その他の獲物となる動物　　確保の方法
これにより、生活は裕福になった。　　返礼に何でも・・・・
よそ者は、四人の子供が欲しいと　　連れて行ってしまった。

子供は射なくなったか、村人たちは幸せになった。
貝を見つけて、食料と木の薬効の知識を身につけた。
この知識を呪術として7人に伝授する。 そして、
　　また、ぞれぞれが　7人に（4年ごとに）



I^{N}KUGTHI ATHI^{N}

小さな玉石の組

会員の資格

断食をしている時に、水、その代わりのもの、小さな石

水中に棲む怪物の　夢とか幻想を見ること

体に、 夢の中に現れた動物、怪物の化粧をする。

病気を治療で治していた。

人により、治せる病気の種類が違っていた。

- 出血の治療
- マッサージ
- 薬草
- 助産婦

ショウブ　　胃腸が悪い時

ケンタッキーコーヒーの根、外皮・・出血、鼻血、出産時の出血

ホウズキの根・・傷を包帯するとき

ガマの根・・やけど

ホップのつる・・傷の手当

野生のバラ・・目の充血した時

発汗小屋（ヨモギの粉を振り掛ける）・・頭痛、リュウマチ、疲労

"死と埋葬の習慣"

生命の統一化と継続性におけるオマハ族の信仰
動物や自然の力に対して、･･･助力を持てめる
個々の動物の特殊な能力と力　を象徴していた。

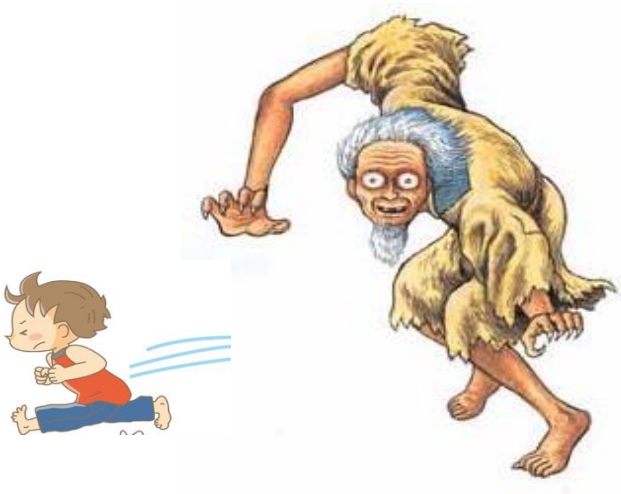
天の川は人間の精神における、死の世界に行くときに辿る道

死後の世界への道（天の川）には分岐点があり、そこにローブを纏った一人の老人が座っている。

良心的で平和な人は,　　親戚の者がいる場所に近道でいける
命令に背いたりする人は　　疲れ果てるような長い道を案内される

幽霊に追いかけられたら・・・・

すぐ後ろに、小枝で小川を書け
幽霊は小川を渡ることが出来ず、それ以上、追いかけることない。



"宗教と道徳"

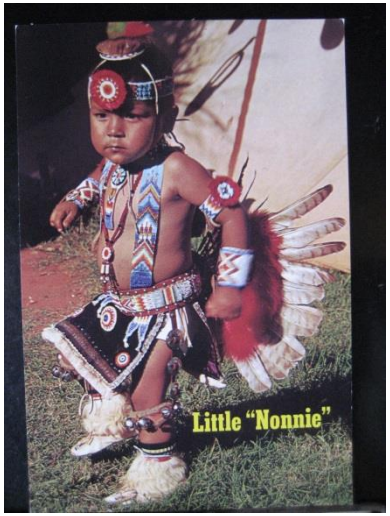
血族集団の神聖なるもの（儀式や典礼など）に対する責任をもつ、特殊な家族がいた。　　伝統を守る人　　こうした人がよく酋長に選ばれた。
この家族は、七人の酋長会が選んだ。

WE'WAÇPA の儀式　　部族の宗教的な儀式

“人々を、仕事に加え、そして、思慮深い平静さに摺る何か”を意味した。
嘆願性の性格を持っていた。

- トウモロコシの儀式
- バッファローの狩と白いバッファローの皮に関連した儀式
- 2本の神聖なるパイプと神聖なる杖に関連した儀式
- 宇宙感への子供の誘導
- 子供の成人式
- 稲妻に対する子供の奉献

Wawaⁿの儀式とは違っていた。



"WAKO^{N}DA"

“精神”

自然の創造物の力
生命の神秘的な力
を意味している

オマハ族は、WAKO^{N}DAのもとに必ず戻ってくる。
自然の力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・道徳的なものを強調
実直でなければならない・・・・・・・・・他の人達と平和に
WAKO^{N}DAはいつも見ている・・・・幸せに暮らす
ーーー> 懲罰を受けずに済むということにはならない。

“WAKO^{N}DA” によって運命付けられている。

“宿命論”

"男達と動物との関係"

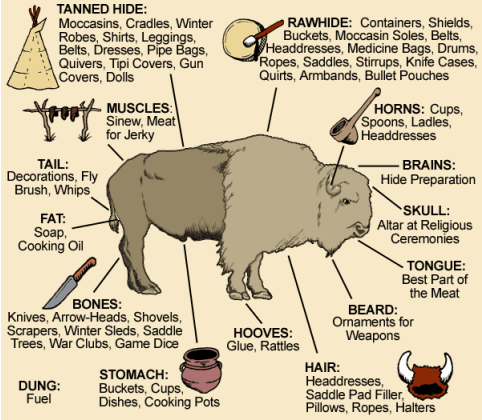
オマハ族の動物たちに対する考え方
動物は、人間に益をもたらすものであり、そして、補助的ナ働きをする。

気持ちをある場所に持っていく努力が必要

生き物全てが、
血族の力で授けられ、
物理的、心理的、そして、神から発散されている力により命が
吹き込まれていると心に描いているようなものである

したがって、
人間は、支配者ではなく、

沢山ある生命を与えられた生物の1つに過ぎない
と言う位置づけが必要



WAKO^{N}DAの力
夫々の“生きているものの形”は、“留まる”、つまり
どこに　WAKO^{N}DA　の創造的な力の働きが実行し、
意思の力の明確な修練があったのか　　と言うことの結果、

人間、動物、大地、空など、あらゆる自然の現象は、
われわれが、そうしたものの中で存在しているものと認識し
ている別のものとの関係を保っているのだ。

食料としての獲物は、“WAKO^{N}DA”が授けてくれたものである。

"酋長達の地位"

見えない力により、優れた能力を持っている。他人のために喜んで人々を助ける人。
長い間、その地位に到達するために必要な行いを実行して来た人。

全ての言葉、行動が、人々の幸せとつながっていた。
酋長は、WAKO^{N}DAと同類である。

酋長とWAKO^{N}DA　との間の媒体が、神聖なる部族のパイプ

"トーテム"

個人的なトーテムは、
盲目的崇拝を意味しているに過ぎない。

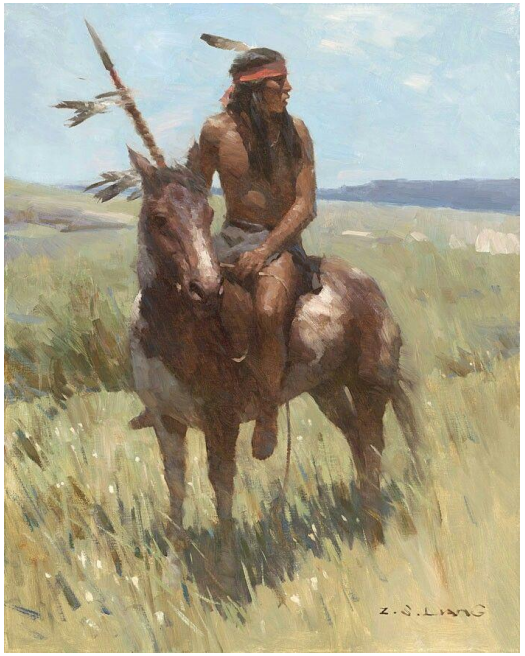
"呪術"

宗教的なものではなく、何の位置づけもされていない。

"戦闘と道徳論"

戦闘の意味は、
　　男同士の戦い、
　　戦士たちの競い合いに過ぎなかった。。

オマハ族には、養子縁組の習慣（捕虜の子供を養子とする･･･オサゲ族）がなく、囚人として扱った。
女たちは逃げることが出来た。



善の特性と善の品行の表現

性格的な素晴らしさと、そして、望まれた社会的な品格を備えることの意味をあたえることが、社会的な生活に当てはめられたようなオマハ族の道徳感を明確にする手助けとなるだろう。

U'piçka、非常に古い言葉で、人は利己的ではないという意味

Wazhi$^{n'}$çabe、自分を制御できる人、不幸につながるようなどんな言葉も、そして、行為も避けるような人に適用される。

Wa'gaçu、実直な、彼の言葉はこれに基づいているに違いない人

Wser'no^{n}hi^{n}、周りの人を助けたり、支えるような人

Wsho$^{n'}$e shtho^{n}、好意の意味、自身がいかに些細なものであるという知識を決して忘れない人；礼儀正しい人

Watha'ethatha、思いやりの深い人

Wazhi$^{n'}$ çabe、献身的な（çabe、用心深い、慎重な）

Debi'go^{n}tha、説得されやすい、身をゆだねる人；また、気前の良い、献身的な人

Wapiu$^{n'}$、賢いことを言う、利口な子供に対して使われる。そういう子供は早死にすると一般的に考えられていた。

Wa'bahtagtha、遠慮がち

悪の特性と悪の品行の表現

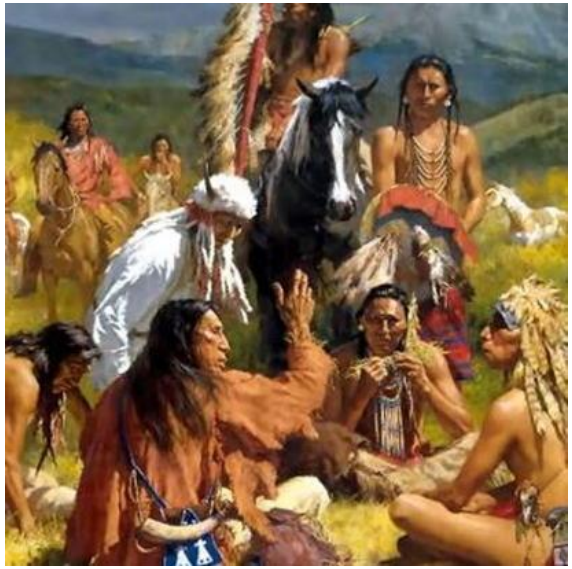
人を理解するときに全くと言っていいほど同じように役に立つことは、非としたり、軽蔑したりすることを表す性格や品行の面に注意を払うことである。次のようなものがこの類である：

I’uçi shto^{n}, 嘘つき
Wamo^{n}’tho^{n} shto^{n}, 泥棒
Nio^{n}’shto^{n} と nage’shto^{n}, 喧嘩っ早い人を指す
U’sh’athi^{n}ga, でしゃばりで、図々しい人間
U’shige, 女達になれなれしくする機会を探っているもの
Wano^{n}’the tu^{n}ga, 凝り屋
Wathito^{n}, 他の人のことや出来事におせっかいな人
Wathi’thdeshto^{n}, 他の人の出来事、あるいは、ビジネスに干渉したり、おせっかいををするもの
Mo^{n}’ça, ほら吹き
I’uthatha, 陰口を言う人
Le’go^{n}ça shto^{n} 話をでっち上げ、他の人がその話を作ったといい降らす人を言う
De’geuthishi, 強情な人
Wani’te, しみったれの人
We’githe shto^{n}, 他の人に“たかる”人
Wana’ shto^{n}, 物乞いをする人
U’zhi^{n} shto^{n}, 目でほしそうな仕草をする人
Wado^{n}’beçnede, ストリーキングをする人
Wazhethi^{n}ge, 感謝したり、丁重であるために関連となる言葉を表すことを忘れるような無礼な人
Mishke’da, みだらな女

ことわざ

次のようなものがいくつかオマハ族の言い伝え、あるいは、ことわざとしてある：

“盗まれた食料が飢えを満たすこと決してない。”
“貧乏人は堅固な乗り手である。”
“誰でも、借り手は好まない。”
“誰も浪費を嘆かない。”
“怠惰の道は面汚しに続く。”
“男は自分自身の矢は自分で作らなければならない。”
“ハンサムな顔がいい夫をつくるのではない。”



"結論"

厳しい自然の中での生活

気候の変化、夏と冬は、お互いに規則正しく交互にやって来る。

基本的な原理は、

生命、自然、そして、社会のあらゆる形態の安定性に、正直であることが必要。

インディアンは、“人々は考えた。“ と。

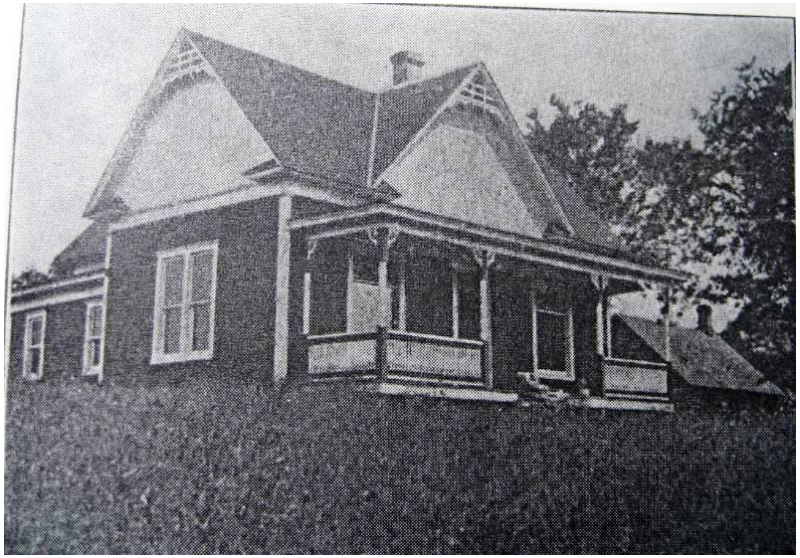
「考えたこととは？」 ･･･私の理解

“自然と共に生きる”

人間の知恵が大事。

RECENT HISTORY OF OMAHA TRIBE

オマハ族が白人と接触するようになってからの世界
１７世紀中頃から



フランス人

Wa’xe ukethi^{n}

と呼ばれていた。

自分たち自身をよそ者と考えていなかった。
従って、インディアンと対等の取引をしていた。

イギリス人

Mo^{n}hi^{n}to^{n}ga

“大きなナイフ”の意味
インディアンを植民地と考えていた。

スペイン人

Hespayu’na

ドイツ人
スウェーデン人
イタリア人
アイルランド人

Ie’thashathu “ガラガラと話す人”

RACE

黒人

Wa’xeçabe “黒い白人”

はじめの頃の取引商たち

La Reine砦　ウィニペグ湖のほとり。ここまで、オマハ族が来ていた。
当時はオマハ族は、Mahahsと呼ばれていた。

オルレアン砦　ミズーリ川を250マイル遡ったところ

1763年にフランスとインディアンとの戦争が終結すると、イギリスがミシシッピー川の東に出てきた

ルイジアナ買収　セントルイスに交易所ができた。

鉄製の道具の導入

ナイフ　尖った石　一本一ドル　儀式の中ではやはり尖った石のナイフが使われていた。男の子を神に捧げる儀式で、髪の房を切る時

鋤、クワ　日常生活で、　クワや鋤などが鉄製になった。狩で使うトウモロコシを砕く平盤

古い時代の職業の衰退と人々のに対する影響

鉄製の道具が入ってきて、従来、時間と手間隙掛けて作っていた日常用具、工芸品が簡単に手に入るようになった。

毎年恒例のバッファロー狩りやトウモロコシの栽培は、生活を維持するための手段であった。

交易のための利益を上げるための狩猟に変わった。

従来から伝わる古い宗教的な考えや習慣が消えていった。

新しい商業的な性格を持った規範が導入された。

↓

女性の立場の低下

装飾と飾りにおける変化

ヤマアラシの棘の刺繍	ビーズ
貝のビーズ	ガラスのビーズ
耳飾	イアリング
塗料	赤、緑、青、黄色
皮	木綿
ビーバーの仕掛け	金属製の罠

とてもいい商売だった

赤い布、青い布と呼ばれていた。

オマハ族が対価として支払っていたのは、
　バッファロー、熊、ビーバー、ミンク、アライグマ、鹿の皮などが基本だった。

貨幣の導入　毛皮の価値

アライグマの毛皮	25セント
バッファロー	$15～$20
カワウソ	$12～$15
ミンク	$ 2～$ 5
ビーバー	$ 4～$ 6

銅貨　75セント　　アライグマの毛皮3枚

ビーバーが沢山いて、簡単に確保出来たので、大物の狩をしなくなっていった。

酒びたりと懲罰

風紀の乱れ

火酒

毛皮の取引業者の間の競合が部族の間に毛皮と取引を確保住めという目的で、酔っていいい気持ちになるという液体が入ってきた。

オマハ族の間にラム酒が大流行（密売）

La Flesche は、自分の肝に銘じたことに正直に、酒を呑んだ男達には、鞭打ちの刑にするというお触れを出した。
　が、秘密結社が出来、酋長の権限が疑問視されるようになった。

取引商に対する政府の統制

1786年の条例では、インディアンの取引商は、アメリカ合衆国の市民でなければならなかった

新しい食料、ゲーム、そして、病気の導入

小麦粉、*wamu'çke*。 この名前は、小麦から作られたパンにも使われた。
コーヒー、*mo^{n}ko^{n}çabe* “黒い薬”
砂糖は*zho^{n}ni* (zho^n, 〝木； “ *ni*, “水”), “楓の砂糖”
大きな白いジャガイモ
牛肉やその他の新鮮な肉は、昔からの名前の*tanu'ka*, “湿った肉”

トランプゲームは*wathi'baba*, “手で繰り返し開いて示すもの”
ダイヤモンド*ke'pa* (“亀の頭);
ハート*ni'deawi^n*(“尻”);
スペード*mo$^{n'}$hiçi*(“矢先”);
クラブは*t'a'zhi*(意味は“決して死なない”)、これは。決して枯れる事のない花にちなんだものだといわれていた。

チェッカーは*wako$^{n'}$ pamo^{n}gthe*(*wako^n*,“賭け事；”

新しい病気は、
天然痘（*di'xe*）が、丁度1800年の前に大流行し、“元気だった部族が僅か2･300人までに減少した”。
はしか(*di'xebtho^{n}çe*,“小さな天然痘”
マラリア(*wa'xewakega*,“白人の病気”)

新しい言葉

お店、w'thiwi^{n}ti,　ここで取引する
窓ガラス、we'ugo^{n}ba, 光を入れて明るくする
煙突、tihuko^{n}(ti,テント;huko^{n} 煙を吸引する古い名前)
テーブル、wa'thate, 食べるところ
椅子、a'gthi^{n}, 座るところ
ロッキングチェアー、a'gthi^{n}kipiçaça, 自分で揺らす
はかり、we'thiho^{n}, これで持ち上げる
暖炉、mo^{n}'çeunethe、火をおこす鉄製品
シャベル、pe'deeithiçe,,　火をおこす
ビン、pe'xeha,　瓢箪の容器の皮
塊、ine'nazhide,　赤く燃えた石
幌馬車、zho^{n}mo^{n}thi^{n},　歩く木
馬、sho^{n}ge,
刈り取り機、wamu'çkeino^{n}çe,　これで麦を刈る
草刈機、xa'deino^{n}çe,　これで草を刈る
鋸、we'magixe,　これで切る
製粉用粉挽き機、u'no^{n}tube　粉を挽く
銀、mo^{n}'çeçka,　白い金属（"お金"にも使われた）
金、mo^{n}çeçkaçi,　黄色の白い金属
ボート,mo^{n}de'gio^{n},　とぶ船
時計、あるいは、柱時計、mi'ido^{n}be,　太陽を見ること
ゴム、gaçuçigem,　伸び縮みする皮
合衆国大統領、Itigo^{n}thaiuzhu (itigo^{n}thai,お爺さん;uzhu 第一の)
インディアン事項処理官Itigo^{n}thaizhi^{n}ga (thai, 誰かのための; zhi^{n}ga、小さな)
将軍Nudo^{n}ho^{n}gauzhu,（nudo^{n}ho^{n}ga,戦闘の指揮官;uzhu、第一の）
大佐、Nuso^{n}ho^{n}gazhi^{n}ga,（zhi^{n}ga,小さな ）
二等兵、thei^{n}, やかん運び人
銃剣、mo^{n}dehi, 槍
旗、haçka,(ha, 皮、çka、白い) 部族の旗の使用から来ている名前
紙、waba'gtheçe, 線を作ること
読むこと、we'thadi (we、行為; thade話をする)
先生、waba'gtheçewethade, 紙を読む人
書くこと、waba'xu, マークを付けること
ペンと鉛筆、we'baxu, これで書くもの
学校、waba'gtheçeathaditi 紙、書くこと、家—紙を読む家
牧師、あるいは、聖職者、wago^{n}'çe 見本を示す人
新聞、waba'gtheçegawa, 開かれた紙、紙を開くこと
写真、i^{n}de'ugaxe,　顔の絵
ミルク、te'çka mo^{n}çeni (te'çka,うし; mo^{n}çe、乳房; ni, 水)
パンケーキ、wamu'çke btheka (wamu'çke, パン; btheka、薄い)
ケーキ、wamu'çke çkithi (çkithi。甘い)
もも、she hi^{n} shkube (she,りんご;hi^{n}、髪の毛;shkube、深い、あるいは、厚い)
陶器、waçe'ço^{n}uxpe, 粘土の皿
タンブラー(ガラス)、ni'ithato^{n}no^{n}' xeego^{n}, 水、飲むこと、お酒のように一半透明のお
　酒のような水を飲むこと
さじ、nib'çetehe,　金属製のバッファーの角（古いバッファローの角で出来たスプム
　ーンのtehelこちなんでいる。）
フォーク、wa'kuwethate (wa'ku、つき錐;wethate、食べるための一食べるための突き
　錐
ビン、wa'kuzhi^{n}ga,　ちいさにつき錐
石炭、no^{n}xthe, 炭
ケロシン、no^{n}xthe wegthi (wegthi, グリース)
大理石、i^{n}ezhi^{n}ga (i^{n}e、石、zhinga、ちいさな)

アメリカ合衆国との協約

1815年の7月 SiouxのPortageで合衆国とオマハ族との間の協定
“全ての事柄におけるあらゆる出来事を合衆国とイギリス本国との間の最近の戦争以前と同じ基盤の上におく。”

1825年 カウンシル　ブラフ
これは、違反を犯したものに対する懲罰に合衆国の主権を与えることと取引商人達を守ることに、主として関係していた。

1830年　プレーリー・ドゥ・チェインで結ばれた協定
オマハ族は、ソークアンドフォクス、スー族の一族、アイオア族、オト族，そして、ミズーリ　族と共に、現在のアイオア州にある土地の所有についての主張を譲渡した。オマハ族、アイオア族、オトー、ヤンクトン、そして、サンテ・スー族は、現在のネブラスカのネマハ郡の保護居留地に、彼らの混血児達は、夫々の個人当り、640エーカーの土地が分譲されることに同意

1836年の10月　ベルビューで結ばれた協定
オマハ族は、オトー、ミズーリ、ヨンクトン、ならびに、サンテ・スー族とともに、ミズーリ州とミズーリ川に挟まれた土地の所有権を合衆国に譲渡

1854年にオマハ族は、合衆国政府とワシントンで協定
彼らは自分達自身が利用するためにホマーの近くの彼らの住んでいた古い村から2・3マイル南の場所のミズーリ川の境界に300,000エーカーの土地を確保し、ネブラスカの狩猟の地域を譲渡した

1872年の6月の条例
オマハ族は、彼ら自身の保護居留地の西の部分から50,000エーカーを政府に売った。

1887年の2月7日
“個人所有条例”における条項により、土地を分配されたインディアンとしてのオマハ族は、合衆国の市民となった。

使節団

達成の困難な高い理想を認識し、人の一生の中でそれを実現することに失敗するというのは、その理想それ自身よりも、個々人の弱さに起因しているものであると理解している。

Joseph La Flesche

Ton'wontongaの村

Joseph La Flesche

フランス人
取引商

女

男

Soui族の捕虜
になる。

Francis La Flesche

フランス人取引商と
はなれ部族に戻る。

Josheph の父親はフランス人、母親は、Inke'çabe　準血族、
Joshephが息子となった、Big Elkは、 We'hinshte 準血族

Josephは、重要な酋長である、Ni'kagahi u'zhu の
一人になった。
Josephが息子のFrancis も酋長となった。

Joesephがたまたま、この部族のところに来て、自分の息子に対面。
子供を引き取る

Joesephが大酋長Big Elkの跡継ぎとなる。 Ni'kagahi u'zhuの一人
となる。
インディアンのために、合衆国政府への使節団に同行
インディアンと白人の取引は、『現金払い』とする。

"若者達の集団"を作り、白人の入植地に似た村を建設インディア
ンから'見せ掛け'の白人たちといわ村を建設。
雄牛の飼育、畑の耕作、
ミッションスクールの開設

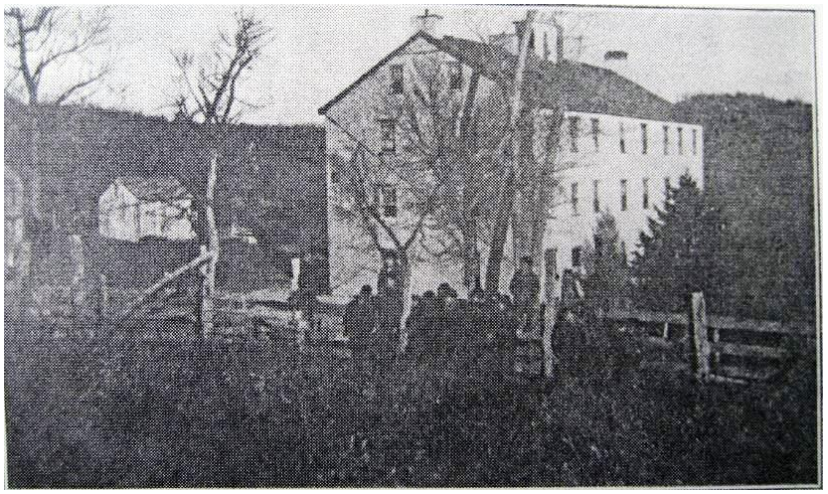
インディアンの酋長として大活躍。

Francis La Flesche

“‘見せ掛け’の白人たちの村”

彼は、彼の娘達に“誉れの印”となるものを残こすために、かれをある程度の地位につけるだけの“功績の数”を数え上げることが出来たが、彼はそれを刺青としていれなかったばかりか、彼の息子達が耳にピアースすることも許さなかった。

“私は、私の息子や娘達が白人と付き合わなければならない時代を理解しながら生きていくだろうといつも確信している、そして、私は、彼らは彼らの将来の環境の中で自分達が好ましくない人達かも知れないなどと思わせるようなものは何であろうと決して、表に表されるべきではないと決めたのだ。”



保護居留区の検証

バッファローの絶滅

Joe1876年の狩を最後に、狩が行なわれなくなった。
牛肉かバッファローの肉の代わりにならなかった。
耕作により十分な食料が手に入らなくなった。

オマハ族が貧困になった。

インディアンの統治が酋長から、インディアン監督局となる。

ポンカ族の悲劇

1877　ポンカ族はニオブラーラの自分たちの土地からインディアン保護居留地区（オクラホマ）に強制移住させられた。

1879　Stnading Bearは、息子の遺体と一緒に、有志とともに元のニオブラーラに戻ることにしたが、旅の途中で合衆国兵士が来て、“居心地の悪い”土地に強制連行。

ニオブラーラの土地の権利書は無効とされた。

ポウニー族の悲劇

1831　天然痘の大流行　　人口が半減　　土地の売却

1836　合衆国政府は、ポウニー族の地にデラウェア族を移住させた。

Chauiの部落での焼き討ち事件

ダコタ族の襲撃

合衆国政府は、ダコタ族を鎮圧することが出来ず、宥和政策をとり、ダコタ族には鉄砲の供与を続けていた。一方、ダコタの襲撃を受けているポウニー族には鉄砲を与えず、インディアン同士の対立を回避していた。

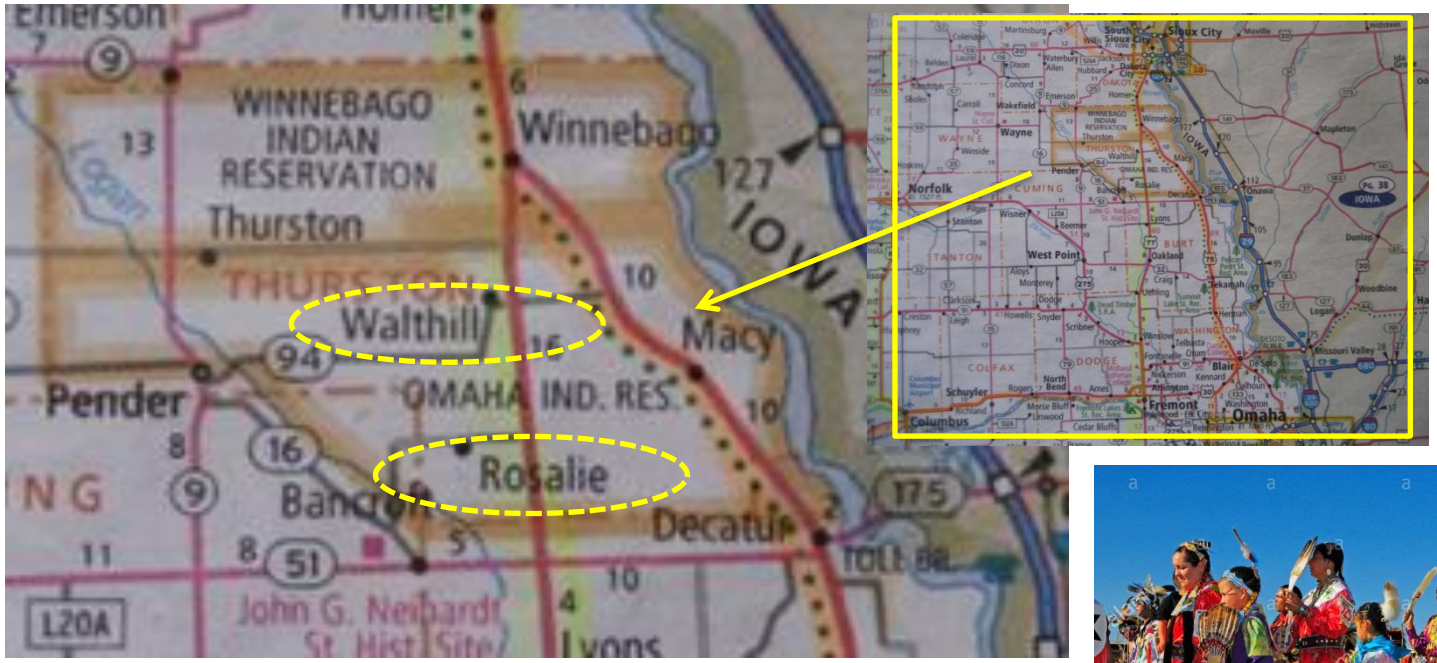
ネブラスカでのインディアンの略奪が収まらなかった。

ポンカ族の貧困、土地の売却、そして、強制移住が始まった。

現在の状況

現在、1,270名　　90%は40歳以下　英語は堪能
中には、物理学者もいる。

Walthill, Rosalie　に居住している。



Thank you
Seiji Suzuki